

報道写真記者と広告写真家の比較作品展

2022年10月5日(水)～31日(月)

主催:公益社団法人日本広告写真家協会(APA)、朝日新聞社、共同通信社、神戸新聞社、

産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社 / 後援:京都市

協力:ダイヤモンド株式会社(ピクトリコ)

ディレクション&コピー:田中有史

会場:京都市四条通地下道

11～12番出入口間(四条富小路-麩屋町通間)
アクセス:阪急電鉄京都河原町駅/京都市営地下鉄四条駅

お問い合わせ:

(展示物)公益社団法人日本広告写真家協会 関西支部 06-6767-3520
(会場)京都市都市計画局 歩くまち京都推進室 075-222-3483



「アウトカット」吉川幸宏・日本広告写真家協会



体に刻んだ「大切な人たち」山崎一輝・毎日新聞社



「舞妓」木村光宏・日本広告写真家協会



「望郷」矢木隆晴・朝日新聞社



「puzzle」岡本卓也・日本広告写真家協会



「その夜の睡り子」松田優・共同通信社

誰が撮っても、同じじゃない。

広告写真家も報道写真記者も、どちらもアーティストではない。職業カメラマンである。作品を撮っているのではなく、仕事の写真を撮っている。ということは、広告主の意向やディレクターの指示、社の方針や上司の命令というものがあるはずだ。

制約。それが、アマチュアカメラマンとの決定的な違いである。では、そこにはまったく自己表現やじぶんのカラーというものはあるのか、じぶんというものを表現しないのか。そんなはずはないだろう。それでは、写真撮影は単にお金を得るための手段に過ぎないじゃないか。じぶんが感じたままに表現するという、表現の本質が存在しないじゃないか。プロカメラマンとは技術を切り売りするだけの仕事なのか。表現というクリエイティブな仕事をしていないのか。そんなはずはない。好きでその世界に入り、好きだからずっと続けている。仕事で撮る写真にも、「これがじぶんの写真だ」と言いたい個性を表出させているはずだ。制約を突破して、じぶんを出してこそプロであるはずだ。そうでなければ、プロとしての矜持はないだろう。そうであるはずだという想いから、今回のテーマが生まれた。

これは、「誰が撮っても、同じじゃない」を世に問う写真展である。

コピーライター・田中有史

関連セミナー(トークイベント)

2022年10月23日(日)17時

毎日新聞京都支局ホール

詳細は裏面

報道写真記者と広告写真家の比較作品展
公式 Twitter です。

<https://twitter.com/HikakuSakuhin>
展覧会やセミナーの最新情報はこちら



